

J-J Rousseau の体育思想へのアプローチ そのⅡ 「公教育思想」の研究を中心として

山 田 岳 志

The approach to J-J Rousseau's thought about physical education

Part Ⅱ mostly the study of thought about public education

Takeshi YAMADA

一般に（それが形式的な見方ではあるにしても），ルソー（J-J Rousseau 1712—1778）の著書，「社会契約論」（Du contract social）が公教育の原理を展開しているものとみるならば，「エミール」（Émile ou de l'éducation）は私教育の原理を展開しているものと考えられよう。しかしながら，「エミール」で，祖国と市民との遊離性をとくルソーの提言を absolute negation と考えてしまうことには少々疑問が残ると思われるし，むしろ結果的には社会改革を志向するものであったと考えられよう。今回は，ルソーの描いた理想的国家，あるいは社会にふさわしい青年の教育，すなわちルソーが描いた人間像において，そこにみられた身体活動が理想的国家，社会に適応できる人間形式にどのような意義をもたせていたのか，それが個人を研究していく上で必要と思われる客観的多義性に注意しながらも，それが flexibility をそこないように問題の追求を試みるものである。

序

ルソーには，まとまった形での公教育論というもの，ほとんどみられない。しかしながら，「公教育によって，早くから若い市民をして，そのすべての熱情を祖国愛に，すべてのかれらの意志を一般意志に集中することを教え，それによってすべての徳を，きわめて偉大な対象にまで高められた人間の心を，高めうる限りの点にまで高めることを教えようであろう。」⁽¹⁾ というように，ルソーが若い時から市民をして，祖国愛を媒介して行なわれる徳の形成を公教育に期していたというならば，又，「人びとの魂にナショナルな形式をあたえ，また彼らが自然的傾向によって，情熱によって，必要によってパトリオットとなるまでに，彼らの意見と趣味を指導すべきである。」⁽²⁾ ことも公教育に期したのであった。「国民教育は自由な人びとにのみ属する。共通の存在を有し，真に法律によって結合されている人びとにのみ国民教育は存在する。」⁽³⁾ このようなことはルソーの公教育論の基本的原理を明らかにしたものにほかならないと思われる。このようにルソーの諸著作においては，小論ながらも公教育の問題を論じたものがいたるところにみられるのである。しからば，ルソーの公教育論というのが「エミール」を中心として展開される私教育と，どのような関係を有するものであろうか。ここにおいては，「エミール」で試みられる『自然人』の教育がどのような過程を経て公教育に陶冶されるのか，ルソーのい

う『自然人』の把握を試みることによって，テーマへのアプローチを考えていきたいと思う。

I 仮設的，条件的推理としての『自然人』

「人間は生まれながらにして自由であるが，しかしいたるところで鉄鎖につながれている。」⁽⁴⁾ 「創造主の手からでるとき，事実はなんでもよくできているのではあるが，人間の手にわたるとなんでもだめになってしまう。」⁽⁵⁾ 「人間は悪である。悲しい連続的な経験によってその証拠は不用である。しかしながら，人間は本来善良であり，わたしはそれを証明したいと信じている。」⁽⁶⁾ これらの諸文章が，ルソーの諸著作にみられる中心的，統一的な思想を形成していることは，それが図式的ではあったにしても，G・ランソンも指摘しているところである。しかも，このようなルソーの思想の核心ともなった言葉の裏には，18世紀社会の現状批判があったことを強く感じとらなければならないと思うのである。「文学，芸術は人々がつながれている鉄鎖の上に花飾りをひろげ，彼らがそのためにこそ生まれたと思われるあの根源的自由の感情を押し殺し，彼らにその奴隸状態を好ませ，彼らをもって文明国民と称せられるものをつくりあげた。」⁽⁷⁾ という現在の社会制度が人間を奴隸状態に仕向けている事実を援護するかのように，又その学問と芸術も，第一義的存在からくる最も害悪なもの，それが人間

の第一義的なもの一、人間の内面的なものまでも奴隷状態に仕向けてしまったとする、ルソーの現状批判は習俗の腐敗と徳の消失との関係が、どの時代どの民族においてもみられるものであるとして、古代史をひも解いてまでその論理展開を試みているのである。このようなルソーの現状批判から、「子供は眼をひらくとともに祖国をみなければならぬ。そして死ぬまで祖国以外のものをみてはならない。すべての真の共和国市民は、母の乳とともに祖国の愛情、すなわち法と自由の愛情を吸飲した。この愛情がかれの全人格を形成する。」⁽⁸⁾ というように傾向的にも、passionにも愛国心を形成することから出発するのである。さて、ルソーの現状批判にしろ、そこから出発する徳有人を目指す教育にしろ、彼がとった方法とは何であったろうか。それは彼の諸著作の中に頻りにあらわれる『自然』(nature)、『自然人』(l'homme de nature) ではなくただろうか。では、ルソーのいう『自然人』とは、はたしてどのようなものであったろうか。「それゆえ、まずはじめにすべて事実をしりぞけよう。なぜなら事実の問題に少しも関係がないからである、われわれがこの主題について立ち入ることのできる探究は、歴史的な真理ではなくて、単に仮説的で条件的な推理であると考えなければならない。そのほうが事物の真の起源を示すよりも、事物の自然を明らかにするのに適当であり、われわれの自然科学者たちが世界の生成について毎日行っている推理に似ているのである。」⁽⁹⁾ これはルソーの全著作にみられる現実切断の思想とみることができよう。しかも彼は自然科学者たちが行なうような仮設的、条件的、推理をも人間関係に導入して、これによって事物の本性を明らかにしようとしたのである。このように、ルソーのいう『自然人』は歴史的な事実の記述ではなくて、人間の本性を形而学的に明らかにしようとする、いわば未来に投射するシンボリックの構成物であった。⁽¹⁰⁾ しかも、この仮設的、条件的推理によって成り立つ、このシンボリックの構成物が、ホッグスのいうような「人間の自然が、各人の各人に対する戦争状態」⁽¹¹⁾、つまり、人間と人間の関係が狼の状態であったり、又、ロックのいうような「人間の自然状態は、自然の法の範囲内で自分の行動を律し、自分が適当と思うままに自分の所有物と身体を処理するような完全な状態」⁽¹²⁾、つまり「自然状態」が自由な状態であっても、両者においては、それが理性によって拘束されなければならなかった状態、つまり社会人と、既存の社会的秩序を捨象することによって成り立つ『自然人』とは当然区別されなければならない。しかしながら、ルソーのいう『自然人』が既存の社会的秩序を捨象する上に成り立つ、仮設的、条件的な人間像であっても、それは現に継続的にすすんでいる18世紀の社会状態を知らない現

代人ではなかったことは言うまでもなからう。

II 『自然人』の教育

「人民を有徳たらしめんと欲するのか。それならば、彼らに祖国を愛させることから始めよ。しかし、もし祖国が彼らにとって、外国人にとってよりも以上に、何ものでもなく、またそれが何人に対しても拒むことができないのしか与えないならば、いかにして彼らは祖国を愛するであろうか。もし彼らが市民的安全すらも享受せず、彼らの財産、生命または自由が、有力者の思うままになり、法律を要求することが可能でもなく、許されなければ、事情はもっと悪くなるであろう。」⁽¹³⁾ ルソーにしてみれば、彼の愛国心は『自然』そのものであり、「人為」である社会を人間の自然な感情によって改革していこうとする彼の社会理論の原理から、18世紀社会をみたとき、すべては絶望的な方向へ進んでいた。そこにおいては、ルソーの考えていた人間をとおして社会を研究し、社会をとおして人間を研究するような状態ではなかったのである。とすれば、残された道はルソーの社会理論の原理に、既存のあらゆる社会的秩序を捨象した人間、つまり『自然人』を適用させていくことによって現状を救い出すことであった。しかしながら、ルソーの社会理論の原理において、彼のいう「一般意志」を政治体の構成員である「人民」が常に正しく物事を判断できるだろうか。「人は常に自分の幸福を望むものであるが、必ずしも幸福とはなんであるかがわかっているわけではない。人民は決して墮落させられることはないが、しばしば欺かれるのである。」⁽¹⁴⁾ このように、もはやルソーのいう『自然人』が既存の社会秩序を、つまり現実を捨象することによって成り立つ人間像ではあっても、18世紀の社会状態を知らない「現代人」をも捨象することによって成り立つものではなかった。もし、そうでなければルソーの提起する仮設的、条件的推理も、また「一般意志」までも無意味なものとなってくるからである。さて、18世紀社会状態が絶望的方向にあったことから、ルソーは、まず社会の理論的再建を願って、彼の根本観念であり、彼のあらゆる思索の出発点であった『自然人』を通して、新しい人間の理念を追求することによって社会を改革することをこころみたのである。ルソーが「エミール」でこころみる教育においても、「慣例とは反対のことをしなさい。」⁽¹⁵⁾ というように既存の社会秩序は勿論のこと、その既存の教育内容をも捨象することによって、人間の教育を試みたのである。さて、ルソーが考えた『自然人』とは、絶対的存在としての人間像であり、それはまた18世紀社会の状態がどういふものかを判断でき、しかも現実の諸々の社会秩序を捨象した人間像であったのである。ルソーがこのように描き出した人

間像こそ、18世紀社会を改革することを可能にする前提条件とされたのであるが、「社会契約論」でみられるような理念的な社会、またそこにおいて祖国の要求する条件を満足させるためには、どのような方法がとられなければならなかったろうか。とりもなおさず、ルソーが『『自然人』』の教育とは、18世紀社会のあらゆる既存のものを捨象した人間像を、つまり社会化されていない人間をつくり出すことではなかったろうか。

Ⅲ 方法としての『自然人』の教育

「公教育はもはや存在しない。そしてもはや存在することもできない。なぜなら、祖国のないところに、もはや市民は存在しないからである。《祖国》と《市民》の二語は、近代語から抹殺されなければならない。」⁽¹⁶⁾ このように、ルソーの『『自然人』』の教育方法は、普遍的な人間形成を追求する18世紀社会における教育を批判することからはじめ、「よい社会制度というのは、最もよく人間本来の自然を抹殺し、人間から、その絶対的な存在を奪って、一つの相対的な存在を与え、《自我》を共同体のなかに転移させてしまう制度のことである。その結果、各個人がもはや自分を1個の個体と考えず、全体のなかの一部と考え、全体のなか⁽¹⁷⁾にあってしか、感覚が働かなくなってしまうように。」⁽¹⁷⁾ 18世紀社会においては、「社会契約論」でみられるような、各構成員は全体に結合するが、しかし自分自身にしか服従することなく、結合前と同様にして自由ではなかった。18世紀の社会を構成する、あらゆる要素、なかでも、学問、芸術等は人間の自由と平等を人間から奪いさるはたらきしかしていなかったのである。さて、ルソーは「エミール」において、その理想的社会に適用できるような教育を、架空の人間像を仕立てて試みたのであるが、そこにおいてみられる一貫した思想ともいべきものが、『『自然』』、『『自然人』』であったことは言うまでもない。ルソーは、人間は教育によって形成されるとして、「その教育は、自然か、人間か、事物かによってなされる。」⁽¹⁸⁾ として、教育の方法にも三つあることをいっている。つまり、(一)自然の教育、(二)事物の教育、(三)人間の教育である。そのなかで、「自然の教育」とは人為によって左右されないよきものであり、「事物の教育」とは人間が自分自身つかさねていく経験、つまり、人間が経験によって獲得するものである。そして、「人間の教育」とは完全に人間が意のままになしうるものであり、18世紀社会において最も弊害をもたらしたものである。ルソーにしては、これらの三つの教育が合致してこそ、完全な教育がなされるところとして、その三つが矛盾すると、それは悪くなるというのである。しかし、ルソーにしても教育が人為であるがかり、それが成功するとは考えていなかった。「教育

が人為であるがかり、それが成功するということはまず不可能である。その成功に必要な不可欠な協力はだれの自由にもならないからだ。細心の注意をはらってなしうることは、せいぜい多少とも目標に近づくことである。」⁽¹⁹⁾ .ではその目標とは何であったろうか。それは『『自然』』の目的にほかならないと言っているのである。つまり、18世紀社会における教育については、その三つの教育というものが相互に矛盾しているものであった。とすれば、18世紀社会をよりよくするためにも、いうなれば、18世紀社会からすこしでもよりよい状態へと進もうとするならば、三つの教育を「われわれにはどうすることもできない」⁽²⁰⁾、「自然の教育」に合致させることしかないと考えたのである。ルソーにすれば、このことが、18世紀社会をよりよくするためのもう一つの研究であった。さて、「自然の教育」は、「人間の器官や内部的成長」の教育とも定義されよう。つまり、ここでは『『自然』』と「内部的成長」とは、ルソーにとってよきものとして把握されていることがうかがえるのである。ルソーにとって教育は「子供の進歩」と人為の社会によってゆがめられるまえの心的傾向に従うことであったのである。さて、ルソーが「子供の進歩」と「人為以前の心的傾向」に従った教育をするとき、それはどのような方法でなされなければならなかったろうか。それは、18世紀社会の既存の社会的秩序が子供の教育について害があるものとみたルソーがしたことは、「それは時をかせぐことではなく、むだにすぎること」⁽²¹⁾であり、また、「最初の教育は、純粋に消極的でなければならない。それは美德を教えることでも、真実を教えることでもなく、心を悪徳から、精神を誤謬から守る」⁽²²⁾ことにあったのである。ルソーにとって子供の完全な教育は、その本性と諸能力と自然的傾向を自由に発展させることにあり、それを妨害するような教育があってはならないと考えたのである。ルソーのこうした考え方においても、18世紀社会において『『自然人』』を教育しようとする時、それは当時の習慣から切りはなした物の見方をしなければならなかったのである。しかし、ルソーが18世紀社会で行なわれているような慣習とは反対なことをするようにすすめるのは、良い教育とは、現行の教育と正反対のことをする教育であるというように、ルソーの消極的教育が一切の教育を否定していると考えてはならない。ただルソーとしては、18世紀社会をみまわしてみた時、それは必ずしもいい方向へ進んでいるものではなかった。それどころか、それは絶望的なものであった。それをよくするためにも現行の教育をもっては不可能であり、そこになんらかの型(イメージ)をつくり出し、それによって従来の教育とは異なった方法で社会を改革していこうとしたのである。「われわれには、子供というものがまったくわかっていない。子供

についてもっている観念がどだいまちがっているのだから、進めば進むほど正道をそれていく。最も賢明な人たちでさえ、子供がどれだけのことを学びうるかということを考えもせず、おとなが何を学ぶべきであるかを一生懸命考えている。彼らは常に子供のなかにおとなを求め、おとなになる前に、子供がまずどんなものであるかということは考えもしない。⁽²³⁾」このことは、18世紀社会の教育を批判するとともに、ルソーが人間の発達のいみをとらえ、いいかえるならば、社会改革を志向する者としてその媒介となる教育を押し進めていく上での前提条件でもあったらうと思うのである。

IV 消極教育論の展開

ルソーの『自然人』の教育方法の特徴として、いわゆる「消極教育」(l'éducation négative)がとりあげられよう。しかも、ルソーが「消極教育」をとりあげる場合、それは理想的な教育、または好ましい人格形成のため、いわば社会化されていない人間像を造り出すためであったことは言うまでもない。さて、ルソーが消極的な教育方法をとる場合、彼は子供の発達段階でいうならば、いつごろをさすのであろうか。「人生における最も危険な時期は、出生から12才までのあいだだ。それは誤謬と悪徳とが芽ばえるときでありながら、まだそれを破壊するための手段をいっさいもっていない時期なのである。」⁽²⁴⁾したがって、ルソーが最初の教育が最も消極的でなければならないと考えるとき、それはまだ感性的な自己愛(amour de soi)によって盲目的に行動する時期にだけ適用される教育方法である。⁽²⁵⁾さて、「人生における最も危険な時期」、これは人生における最も重要な時期というように置き換えることができよう。この時期において、ルソーは教育上の二つの原理を守らねばならないとした。一つは「時をむだにすること」であり、もう一つは、「道徳的訓練」は自然の成り行きに委せるべきであることだった。このようにルソーが幼年期においてとる教育方法が、現状の教育批判からきていることは言うまでもない。「現在を不確かな未来のために犠牲にし、子供にあらゆる種類の枷をはめ、彼がけっして享受することはあるまいと思われる、何だかわけのわからぬ幸福と称するものを遠い将来に用意するために、まず子供をみじめにすることから始める。あの野蛮な教育を、どう考えたらよいというのか。」⁽²⁶⁾このように、ルソーが現状批判をするとき、子供は人間の生涯の秩序のうち立場をもっているものであるから、大人は大人の立場で、又子供は子供の立場に立ってものを考えていかなければならないとするのである。では、ルソーが『自然人』の幼年期に行なった、「時をむだにする教育」とは具体的にはどのようなものであったらうか。「人間

よ、人間的でありなさい。それがあなたたちの第一の義務なのだ。——子供を愛しなさい。その遊戯や、その楽しみや、その愛らしい本能をいつくしんでやりなさい。⁽²⁷⁾」「彼の肉体と、肉体の諸器官を、感覚を力を鍛練しなさい。しかし魂のほうはできるだけ長い間遊ばせておくのだ。」⁽²⁸⁾ルソーによれば、人間の最初の理性は感覚的理性であり、この感覚的理性が十分に発揮されてこそ、知的理性の発達も可能であるとするのである。「考えることを学ぶためには、われわれの手足を、感覚を器官を訓練しなければならない。それがわれわれの知性の道具なのだ。その道具を最大限に活用するためには、それを提供する肉体がたくましく、健康でなければならない。このように、人間のほんとうの理性は、肉体と関係なく形成されるどころか、健全な肉体こそが、精神の働きを容易にし、確実にするのだ。」⁽²⁹⁾このように、ルソーが生まれてから12才になるまで、「器官や内部的成長」を重視した教育方法を貫ぬいてきたことは、18世紀社会の知的早教育に対する批判があったことは言うまでもなからう。ルソーにしてみれば、その知的早教育の排撃こそ、彼が展開する消極教育論の目的であったと思われる。つまり、ルソーによれば、理性の年齢に達する以前に子供が受け入れるものといえば、それは観念ではなくて、映像なのである。だから、12才にいたるまでの子供の理性の訴えというものは、ほとんどみられないのである。しからば、18世紀社会において行なわれていたような教育、すなわち、子供に対して理性の働きを予想するような教育はさしひかえよというのである。しかしこのようなことからルソーが理性的人間を度外視したと思っはならない。ルソーにしても教育の終極の目標は理性的な人間をつくることにあったのである。「良い教育たる最高の作品は、理性的な人間をつくることである。それなのにみんな子供を理性によって育てると言い張るのだ。それではおしまいから始めるようなものだ。」⁽³⁰⁾ルソーが18世紀社会の慣例とは反対のことをするようにすすめる理由がここにもあると思える。さて、ルソーの消極的教育方法が、まだ理性の芽ばえをみない幼年期において、将来はそのことが理性的人間の形成をなす基礎となるであろうとした、感覚の訓練、あるいは身体の訓練が、いいかえるならば、幼年期において丈夫な身体というものが、幼年期の生活にどのような影響を与えたのであろうか。「肉体は、精神の命に従えるだけ強壯であることが必要だ。よい従者は強壯でなければならないからだ。」⁽³¹⁾「肉体は弱ければ弱いほど命令する。逆に強ければ強いほど服従するものだ。あらゆる肉体的な情念は柔軟な肉体に宿る。そして柔軟な肉体がそれらの情念を満たすことができなければできないほど、肉体はその欲情にいら立ち苦しむのだ。ひよわな肉体は精神をも

弱くする。」⁽³²⁾、ルソーによれば、身体は精神に服従するだけの活力を有するものでなければならぬとし、精神の善良なる下僕たる身体は強壯でなければならぬとするのである。つまり、ルソーは虚弱な身体と情欲との必然的な関係を強調しているのである。全ての邪悪は虚弱から生じる——いわゆる子供は何よりもまず健康でなければならぬ。身体は健康こそ、あらゆる精神的教育の基礎であり、出発点なのである。ここにも、ルソーが「エミール」において、「順調な⁽³³⁾出産、りっぱな体格をもった、たくましい、健康な子供⁽³³⁾」を選んだ理由がみられるのである。このようにルソーの消極的な教育方法は、18世紀社会の知的早教育の批判にかえながらも、子供の発達段階を踏まえつつ、しかもそれが将来を見通しての教育方法であったことは、ある意味においては、ルソーのいう「時をむだにする教育」は積極的な教育条件と考えられよう。「子供の最初の感覚は、純粋に感情の領域に属する⁽³⁴⁾」ものであっても、その感覚的存在が行動的になるにつれて、その諸能力は判別力を身につけてくるようになり、「体力が自己保存に必要な程度を越えるようになってこそはじめて、この余剰の体力を他の用途に利用できる思弁的能力がかれのうちに発達するのである。」⁽³⁵⁾、つまり、ルソーにとって身体を鍛練することによって「精神の働きを害するなど空想するのはあわれむべき⁽³⁶⁾ 謬見であり」かえって、理性的な大人を育てようとするならば、まず、その理性が働きやすくなるための諸能力を育てるように、つまり、大人になってから精神的活動が充分なえるように、身体的活動を充分行なうようにいっているのである。そこには鍛練によってつちかわれたものが、思考的手段となるようなものでなければならぬであったのである。さて、「自然の指導にのみまかせられた⁽³⁷⁾ 不断の訓練は身体を強く鍛えながら、一方精神も痴愚にすることがないばかりか、むしろ逆に、子供のころに持つことのできるような、そして、どんな年齢にも一番必要なただ一種の理性を育ててくれるのである。」⁽³⁷⁾、つまり、自然によって訓練されることで、自分の力や使用方法や、自分をとりまく物体との関係を知るのである。幼年期に見聞し、行動することが、幼年期の一種の理性となつて育つのであり、これは人間の悟性に入ってくるすべてのものは必ず感覚を通過するのであるから力だけを鍛えてもだめだ。力を導びく感覚を訓練しなければいけない。人間の最初の理性は感覚理性であり、これが知的性理にまで働かかけなければならぬのである。だから、我々は考えることを学ぶ前に、我々の手足や感覚、器官を訓練しておかなければならぬのである。ルソーにしてみれば、人間の真の理性は、身体と全く無縁に形成されるものではなくて、むしろ身体の出来、不出来によって精神の働き

も決まってくる——ルソーにおいて身体と精神との関係についてこのような解釈は極端であろうか。ルソーの消極的な教育方法というものが、もはや、「時をむだにする教育」ではなくて、むしろ幼年期において、その感覚的理性を形成していく過程においては、積極的な教育方法がとられていることはいうまでもなからう。ルソーの消極的教育方法の特徴は幼年期に必要な身体の訓練に専心させ、そうすることによって、精神的活動を極度に押さえながらも小児的理性の発展をこころみたとにこそあったと思うのである。

V 公教育の特色

「われわれはまず彼の肉体と感覚を訓練してから、彼の精神と判断を訓練した。最後に体の動きと能力の働きを結びつけた。人間を完成させるためには、愛情をもった、感受性のある存在をつくりあげること、つまり理性を感情によって仕上げる⁽³⁸⁾ ことが残っているだけだ。」ルソーによれば、人間は二度生まれる、それは「一度は生存するため、二度めは生きるため」としてである。ルソーのいう人間の第二の誕生こそ人間の完成と向っていく出発点だと思われるのであるが、「いままでわれわれの配慮は子供の遊戯にすぎなかった。今になってはじめて、それらの配慮は真の重要性を帯びるのである。世間一般の教育の終るこの時期こそ、まさにわれわれの教育の始まるべき時期なのだ。」⁽³⁹⁾。このように『自然人』は、自分がすべてであり、自分自身のこと、あるいは一身体の関係にある人以外は考えなかった人間から。「人間にふさわしい研究は、人間関係の研究である。人間が、その肉体的存在によってしか自分を知らない⁽⁴⁰⁾ ちは自分を事物との関係によって研究しなければならない。それが幼年期の使い道だ。自分の精神的存在を感じるようになったら、自分を他の人間たちと関係によって研究しなければならない。それがいま、われわれの到達したところから始めて、人生全体の使い道となるのである。」⁽⁴⁰⁾、このように『自然人』の自己愛は、もはや利己的なものではなくて、やがて発展した社会生活の中核をなすべき共通なものとしての一般意志の萌芽を含むべきものになってくるのである。そこには、もはや「エミール」において、『自然人』が「社会人」と対置せしめられたようなことは不可能である。というのは、「エミールはいつも一人であるようにはつくられていない。社会の一員として、彼はその義務を果さなければならない。人々とともに生きるようにつくられているのであるから、人々を知らなければならない。彼は人間一般を知っている。」⁽⁴¹⁾。このように、『自然人』がもはや、排他的な、又孤独な存在としての人物ではなく、完全な市民にまで陶冶されていたことがわかると思うのである。さて、ルソーが道徳的秩序のなかに足を踏み入れる

ことは人間としての完成を目指す出発点であったといったり、又「社会は人間によって、人間は社会によって研究なされなければならない」（傍点筆者）とするとき、政治と道徳とを別々に考えることは不可能であると思われる。このように考えると、『自然人』の教育の終極的目標が「社会人」教育を意味するものであったとしても、何ら差しつかえがないように思われるのである。とすると、「エミール」において、ルソーが公教育を否定するとき、それは公教育の前提条件となる民約論的社会的喪失による conditional negation であったと言える。では、民約論的社會において、公教育が私教育に優先する理由はどこにあったのだろうか。それは契約社会と自然的社會の相違からくるものにほかならないと思われる。さて、ルソーの公教育の特徴が、祖国愛による徳の形成にあったことは、彼の諸著作のいたるところに、その意図をみつけることができよう。ルソーにしてみれば、18世紀社會の人間は、「フランス人も、イギリス人も、スペイン人も、ロシア人も；ほとんどすべて同じ人間である。」⁽⁴²⁾として当時の教育を批判しているのであるが、それは僧侶や外国人による画一的な国民教育を批判したのであり、ルソーにしてみれば公教育によって、早くから若い市民として、そのすべての熱情を祖国愛に、というように「祖国愛」を通して徳の形成を公教育に期したのである。では、ソールのいう公教育は具体的にはどのようなものであったろうか。「わたしたちは生きることをはじめると同時に学びはじめる。」⁽⁴³⁾というように、ルソーの公教育は誕生即教育であり、「子供は眼をひらくとともに祖国をみななければならない。そして死ぬまで祖国以外のものをみてはならない。すべての真の共和国の市民は、母の乳とともに祖国の愛情、すなわち法と自由の愛情を吸飲した。この愛情がかれの全人格を形成する。かれは祖国以外をみない。かれは祖国のためにしか生活しない。かれは一人になるや否やもはや何ものでもなくなる。祖国をはなれるや否や、かれはもはや存在の意味を失なう。もし死なないのであれば、かれは死ぬよりもっと悪い存在になってしまう。」⁽⁴⁴⁾このようなルソーの考えは市民として傾向的にも、passion にも愛国者を形成しようとしたのである。ではルソーの「教育観」の foundation となるものは何であったろうか。それはもはや『自然人』の教育ではなくて、統制の下での国民教育であった。「エミール」においては公教育は否定されたが、全体の精神は全く別問題であった。「家庭教育を好み、自分の好むままに子供を教育しようとする両親も、体育競技には子供を出席させなければならない。子供たちの知育 (instruction) は、家庭教育あるいは私教育を利用しては差しつかえない。しかし公的行事として行なわれる体育競技 (exercice corporeles et

jeux) には常にすべての子供たちが等しく参加しなければならない。⁽⁴⁵⁾ルソーの公教育の特徴が、強制的な平等共通の教育形態による体育尊重であったことが、ここにはっきりうかがえるのである。ではルソーは知的教育は私教育に委ねながらも、体育競技だけはなぜ全員参加の義務を要求したのであるか。別言すれば、ルソーは体育競技にどのような教育的効果を期待したのであるか。

「肉体は、精神の命に従えるだけ強壯であることが必要だ。——あらゆる肉体的な情念は柔軟な肉体に宿る」⁽⁴⁶⁾、しかしこのようなルソーの体育競技への期待は、単に子供たちの身体を強壯にし、敏捷にするような健康的側面からだけでなく、「早くから導法精神、平等観、同胞愛、競争心を体得させ、またかれらを同胞とみているところでの生活と、公の是認を切望することをならす」⁽⁴⁷⁾ことであった。このことは体育競技を通して市民に不可欠の「祖国愛」の精神を実践的に培うことを試みたものにほかならないのである。別言すれば、体育競技を通して個人の恣意を社会共通の意志に合致させる——このようにして徳の形成を試みたのである。ルソーはこの意味においても、体育競技を「強健、健全な身体」の形成に役立つばかりか、徳を形成する上でもきわめて有効であり「教育の中でもっとも重要な部分」であると高く評価しているが、ルソーの体育論が、「エミール」に示した消極教育論の原則が、公教育への適用であったことがうかがわれる。さて、ルソーの『自然人』の教育の目的が「真の市民」を育成することであったことは言うまでもない。しかるに、ルソーが「もはや祖国はなくなったのだから市民もあるはずがないからだ」⁽⁴⁸⁾というのは先述したように conditional negation にすぎないのである。又、「エミール」の冒頭でいうような「創造主の手から出る時は事物は何でもよくできているのであるが、人間の手にはわたるとなるとだめになってしまう」⁽⁴⁹⁾、このような考えは18世紀社會への批判ばかりか、ルソーの公教育への guiding を意味するものであろう。又それは公教育を具体化していくための suggestion ともなったのである。ルソーの生きた時代が「学問や芸術」の発展で、人間本来の姿を見失なう寸前におかれていた。ルソーはこのような社會を憂えて現体制を改革するためにも、まず人間の改革を願ったのである。ルソーにしてみれば、その最も理想としたのが、スパルタの社會であり、その国で行なわれていたような教育ではなかったか。ルソーの体育論が、消極的教育方法としてとられた悪徳防止の手段は、いまや現代社會における人間を改革しようという積極的の意味にまで高められなければならない。ルソーにしてみれば、幼年期において行なわれた身体活動、そこにおいて得られた小兒的理性、つまり感覺的理性というものが、「真の人間形成」すなわち「真の市民」の形成

に対して積極的に働きかけるということを期待したのである。

結 語

以上、ルソーの公教育思想が、「エミール」に見い出されるような道徳教育論を中核として展開されていることをみてきた。ルソーにしてみれば、市民をつくるか、それとも人間をつくるかということが、「エミール」の最も根本的な問いかけであるが、彼にして、祖国のないところに市民はなく、市民でない人間はもはや、人間らしい人間でなかったのである。ルソーが18世紀社会の人間を本当の人間たらしめるためには、そこには祖国が必要であった。そして、人間を市民にするような祖国は、市民間の約束を合法化する唯一の条件を持ち合わせていなければならなかった。「エミール」においては、そのような意味での自由な人間をつくるための教育論であったろう。また、ルソーにしては人間が市民として生きるに値する理想的国家を求めてやまなかったし、また、そのような理想的国家を担うことができるような市民の有り方をも、求めてやまなかったのである。そこにおいてルソーの『自然人』は、彼が人間として、市民として生きていくためには、人間にとってなにかふさわしいものであるかを判断することができなくてはならなかったのである。そこに『自然人』の社会における道徳的責任があったのである。このように考える時、公共の利益との合致を求めて行動する有徳人の形成にあって『自然人』の消極的教育方法でとられた身体活動も、積極的に「祖国愛」、「人類愛」への奉仕を可能にするものと思われる。このような意味においても、ルソーの体育思想が、単に「子供の発見」とどまるものと解釈されてはならないと思われる。というのは子供の中に見出されかものが、将来、それが社会を改革しようような、つまり、社会に還元されてこそ、ルソーの体育思想というものが貫らぬかたことになるとと思われる。ルソーが身体活動において、その教育的価値を見出す時、それは道徳的評価によってではなかったらうか。

参 考・引用文献

- (1) ルソー 『政治経済論』河野健二訳、岩波文庫P70
 - (2) 桑原武夫編『フランス革命の研究』岩波書店P41
 - (3) ibid P23
 - (4) ルソー『社会契約編』井上幸治訳、中央公論社P232
 - (5) ルソー『エミール』永杉喜輔、宮本文好、押村襄共訳玉川大学出版P13
 - (6) ルソー『人間不平等起源論』小林善彦訳、中央公論社P195
 - (7) ルソー『学問・芸術論』平岡昇訳、中央公論社P66
 - (8) 『フランス革命の研究』P31
 - (9) 『人間不平等起源論』P119~120
 - (10) 森昭、村井実『教育の思想』（教育学全集2）小学館P77
 - (11) ホッヴス『リヴァイアサン』（世界の名著23）永井道雄、宗片邦雄訳中央公論社P160
 - (12) ロック『統治論』（世界の名著27）宮川透訳、中央公論社P194
 - (13) 『政治経済論』P31
 - (14) 『社会契約論』P252
 - (15) 『エミール』P398
 - (16) 『エミール』（世界の名著30）P369
 - (17) ibid P368
 - (18) ibid P365
 - (19) ibid P366
 - (20) ibid P366
 - (21) ibid P397
 - (22) ibid P397
 - (23) ibid P361
 - (24) ibid P397
 - (25) 『教育の思想』P81
 - (26) 『エミール』（世界の名著30）P387
 - (27) ibid P386
 - (28) ibid P398
 - (29) ibid P412
 - (30) ibid P396
 - (31) 『エミール』（世界教育宝典）P34
 - (32) ibid P34
 - (33) 『エミール』（世界の名著30）P372
 - (34) ibid P375
 - (35) 『エミール』（世界教育宝典）P113
 - (36) ibid P113
 - (37) ibid P121
 - (38) 『エミール』（世界の名著30）P458
 - (39) ibid 466(40)ibid P469
 - (41) ibid P504
 - (42) 松島均『フランス革命期における公教育制度の成立過程』亜紀書房 P30
 - (43) 『エミール』（世界の名著30）P374
 - (44) 『フランス革命期における公教育制度の成立過程』P31
 - (45) ibid P32
 - (46) ibid P32
 - (47) 『エミール』（世界の名著30）P369
 - (48) 『エミール』（世界教育宝典）P13
- その他
1. 桑原武夫『ルソー研究』岩波書店
 2. 福島政雄『教育生命の原理』福村出版

3. 酒井三郎『ジャン・ジャック・ルソーの史学史的研
究』小川出版
4. 荘司邪子『ヒューマニズムの教育思想』力江書院
5. 松浦鶴造訳『教育思想史』法政大学出版局
6. 稲富栄次郎『ルソーの教育思想』福村書店
7. 依田新, 他『人格形成』(教育学全集11) 小学館
8. Cowell, et al. "Philosophy and Principles of
Physical education." Prentice-Hall 1963
9. Cassier, E. "The question of Jean-Jacque
Rousseau." New York 1954
10. Hagen, R. "Von Rousseau und Möblematik
der democratic." (Deutsche Rundschau, Mar)
1950
11. Zeigler, "Philosophuical Foundations for
physical, Health and Recreation
education" Prentio-Hall 1964